

## 晴れた雪みちどこでも行ける

雪で埋もれた林の道を  
一人足元見ながら登る  
靴についでるワカンの隙間から弾ける雪  
踏みしめるたびえぐられる音  
その雪をまた踏みしめるたび  
しばらく続く静かな空間に響きわたる

それは冬のある夜ふしぎな夢を見た  
45年前の自分に戻っていた  
足元の白い世界  
久しぶりの感触

明るくなってふと気づくと  
抜けた林に広がる  
青白い空と光る大地  
思わず立ち止まり見渡す

晴れた雪みち行きたいところ  
リズムをつけてどこでもゆける  
先ほどまでのえぐられる雪の音も聞こえない  
そのうち急な登りになって  
押し当て登る膝小僧には  
雪が妙に柔らかかであったかく感じるようだ

気がついたらそこはくんだり坂  
松葉たくさん混ざる白い道  
足跡消しながら  
しゃがんで滑っていた

これはさっきの自分の足跡かな  
滑り切って前を見る  
その頃の昔の今はもう無い  
元谷小屋が待っていた

雪で埋もれた林の道を  
一人足元見ながら登る  
靴についでるワカンの隙間から弾ける雪が  
踏みしめるたびえぐられる音  
その雪をまた踏みしめるたび  
しばらく続く静かな空間に響きわたる

## 白い鳥

まだ東にある太陽  
郊外の町 照らす  
広い平野の合間  
流れる水路

小さなビルの佇まい  
見えた目綺麗な用水路に一羽  
足が長く首も長い  
白く細い鳥

背筋をピンと立て  
じっとしている  
一瞬こちらを見た  
空が映る黒いみなもに  
静かな流れの向こう

その昔には彼らが  
人と住んでた里山  
たくさんあった中で  
のんびり暮らしていた

その場所が少なくなって  
こうしてここに立っている  
静かな流れに  
一羽羽ばたいて

今はおそらく高速道路  
インターチェンジのループの中  
可愛い子供が待つねぐらに  
気をつけて帰ってね

まだ東にある太陽  
郊外の町 照らす  
広い平野の合間  
流れる水路

## あと少しで

見慣れた町の 見慣れた風景  
暖かくなる前 もう見れなくなる

そんなあと少しで  
気持ち変えられるのか  
決められた時間  
当たり前過ぎる

当たり前のように  
優しかった人

年度末終わったら それぞれ新生活  
不安を隠せない それよりも今は

そんなあと少しの  
安心な温もり  
共にできないのは  
わかっているけれど

わかってくれてる  
何も言わない人

## 眠れない夜

窓の外はまだ暗い  
薄明かり眩しく眠れない

まだ少ししか眠ってないのに  
再び眠れず時間だけ過ぎる

なかなか眠れない夜  
心細くなってくる

眠気を待つつらさが  
真夜中のベッドで

モバイル取り出して  
イヤホンまでつけて  
流れる画像まで見て  
もう眠るできない

窓の外はまだ暗い  
薄明かり眩しく眠れない

まだ朝までは時間があるのに  
再び眠れずむっくり起きて

暗い足元照らす  
モバイルの青い光

電灯つけてしまうと  
もう眠れない気もして

トイレの小窓開け  
ひんやり冷たい風  
頭が冴えてきて  
もう眠るできない

窓の外はまだ暗い  
薄明かり眩しく眠れない

まだ少ししか眠ってないのに  
再び眠れず時間だけ過ぎる

## こもれびを浴びて

ずっと前からそれは気づいてたんだ  
何が起きてもおどろかなくなったよ  
よくないことばかり起きているから  
ああひとごとのように思ってるから

それとなくテレビ眺めてはみても  
悪いニュースばかり当たり前になった  
伝える声も仕方なさそう  
やり場のなさに目もそらしてしまう

見つめようどんなこともそう前向きに  
くらいもの包んでくれる  
こもれびのように

ひとけのない道抜けたら車止めて  
ゆるいカーブの端 潜む林の中に  
何かがつごめく気配ときめく  
見飽きた日常 刺激を求め

ふと気づいた頃場所を知りたくなって  
それとなく手にしたふところのモバイル  
見たくなかった未読の知らせに  
ひきもどされるいつもの自分

続けようやりたいことそう前向きに  
まぶしさ散りばめてる  
こもれびのように

続けようやりたいことそう前向きに  
まぶしさ散りばめてる  
こもれびのように

## 冬の月と星

寒く暗い道で  
耳にぶつかる風  
半分曇った夜空  
そこから抜け出す三日月

東に突き出してる灯台  
青い光を放ちながら  
白く光り寄せる波が  
襲ってくるようで怖くなる

足元見えない道  
風と飛沫を避け  
振り返って見上げたなら  
月のそばに光る星

立ち止まり見える木陰から  
オレンジの光漏れる  
天然温泉宿のあかり  
ここでただひとつ暖かいもの

## 遠く離れて

30過ぎたころに  
しばらく遠く離れて  
ひとり住み慣れぬ町  
赴任したこと思い出す

小さな部屋で 何一つの音なく  
埋まらない空間を  
湯割り一つで満たす

そのころモバイルもなく  
声聞くに必要なコイン  
電話越しの声に  
ひとりでないことを知る

そのころの仲間に  
同じような人もいた  
まだ幼い子見るため  
毎週帰宅していた

朝の光が まだ差し込まない  
暗い道コートの際を  
搦んで肩丸める

そのころモバイルもなく  
紙の写真ふところに  
笑顔で写る家族が  
心温める

## やっぱり見に来てよかった

人影を見ることない  
秋の終わりの浜辺で  
ふきすぎる風の中を  
両手をポケットに

季節が変わって  
誰もいないところ  
新しい貝殻  
拾って胸にしまう

何もなかったこと  
こんなに綺麗だとは  
自然の色だけ贅沢に広がる  
やっぱり見に来てよかった

足跡のない浜辺に  
足跡をつけてゆく  
いったいなぜこんなにも  
綺麗になるのだろう

一つだけ見つけた  
誰かが作った  
小さな砂の城  
置き去りにされて

それにしても  
風と波の力  
全部入れ替えたような砂の色

何もなかったこと  
こんなに綺麗だとは  
自然の色だけ贅沢に広がる  
やっぱり見に来てよかった